

## 深江の心象風景（4）

## 深江周辺の風景

筆者 岡田 茂 義

## 十七、新道を走る馬車型自動車

頃は第四十九号に記載されている明治天皇崩御の前後、即ち明治時代の終末期である。新道をオープン型の馬車にエンジンを付けた様な自動車が走って来る。我々子供達（何れも六〜七才位）は先を競って車と共に一緒に走る。運転手の外国人が鞭を振って、我々を振り払おうとする。一度その鞭が顔に当たって痛かった思いが今も記憶に残っている。

当時天皇陛下は行幸の際、数頭立てのオープン馬車をご使用



図1 明治43年ごろの深江  
浜街道から分岐して南側に新道



写真1 新道 岡田善蔵宅の南側附近



図2 大正12年ごろの深江  
新道が「街道」となり浜街道より太く描かれている

になった。その後自動車に変えられたが、各国大使が新任挨拶のため宮中へ参内する時は宮内庁所属のこの馬車を使用して自動車の流れの中を悠々と走らせているのを見た。

## 十八、横屋のゴルフ場

新道の風物につき一件書き添える。青木と魚崎との間に新道に沿って大きな草原があった。地名は横屋と呼んで、そこには一軒の家も無かった。

遙か南を眺めると向うの海岸にはスタンダードの煉瓦造りの石油貯蔵倉庫があった。それと新道との間の広漠たる草原がゴル

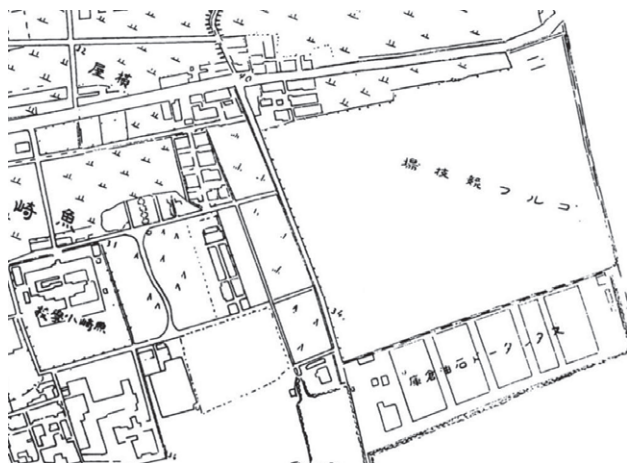


図3 横屋ゴルフ場とスタンダード石油（『魚崎町誌』）

フ場になっていて、スタンダードの人達がプレーした。小学校初年度の我々の友達も、時々このコースのロスト・ボールを拾って学校に持って来る。皆、歓声を上げて喜び、ボールを切り開いて中のゴム糸を取り出し各人に分け合った。これが皆の竹製模型飛行機のプロペラを廻すゴム糸となった。

当時六甲ゴルフ場は既にあった様だ。後記してある「六甲ゴルフ場」に記載の「短い鉛筆」に依ると、明治三十四年英国人グルームによって造られている。横屋の方はいつ始められたか知らないが六甲と並行して存在し、而も完備しない、むしろさながらゴルフ場であったので、古くとも日本最初のゴルフ場とは云い難い。又、そのあと横屋に甲南ゴルフ場が出来ている。同じく「短い鉛筆」による。南郷三郎（ゴルフ界の重鎮）等によるものと思う。或期間この名前の下でその草原が利用されていた様だ。

### 十九、六甲ゴルフ場

南郷茂宏「短い鉛筆」によると英国人グルームによって、六

甲山上に日本で初めて四ホールのゴルフ場が造られた。彼は明治元年二十二才の時来朝し、ゴルフ場を造る数年前に六甲山最初の別荘を建てた。六甲山の開拓者でもある。その後、社団法人神戸ゴルフ倶楽部として日本人も入会させ、明治四十年には、一八ホールをオープンしたと記載されている。然し、戦後私がプレーした時は二、三ホールの不足があったことを記憶している。峻い（げん）ホールを使用していなかったのかも知れない。

外国人により創設されたゴルフ場であるので、クラブ・ハウスの表示も日本離れたものがたくさんあって戸惑った。W・Cの表示の所が、正式にウォーター・クロセット（Water closet）と書いてあるので便所とは思えなかった。今でもそれ等の難しい表示が残っているだろう。持ち運ぶクラブの呼び方も同様で



写真2 神戸ゴルフ倶楽部（絵はがき「六甲山上ゴルフ遊戯場」昭和7年改修前の初代倶楽部ハウスが写っている）



写真3 六甲山の籠昇き（絵はがき「有馬六甲山道」）

ドライバーはW・1、スプーンはW・3、ブラッシーはW・4、マッシーはアイアンの5、マッシー・ニブリックはアイアンの8、それにバターと計六本くらいで廻つたのだろう。我孫子ゴルフ場の会誌によるとdriverは飛ばすclub、spoonはその形、バツフィーは球を打った時の擬音、ブラッシーはブラス（brass、真鍮）

を底に張り付けたからとある。「何かちよつとした思いつきで愛称が始まったように思われる。」と書いてあった。

尚、「マッシー」とは伊達男、「ニブリック」は醜男の意味であることも面白く付記されていた。

六甲ゴルフ場でプレーするメンバーは籠（荷い籠）で山上まで担ぎ上げてもらった。この籠昇きの一人が有名なプロゴルファーになった。宮本留吉である。彼は日本オープンを六度制覇し、全米チャンピオンのビリー・バークとプレー・オフし、ボビー・ジョーンズにも勝った記録を持っている。ゴルフ界のリーダー赤星六郎のコーチを受けた。

## 二十、大阪湾を往復していた貨物運搬船

深江の浜から沖を見れば、いつも黒い貨物船（艀型の運搬船）が西へ東へと往來していた。神戸港と大阪港を連絡する運搬船でその往來は絶えなかった。

当時工場のあらゆる機械は総べて蒸気機関で動かした。その燃料は石炭である。大阪へ行く時阪神電車で淀川の鉄橋を渡ると途端に空が曇る。この地区の数多い中小企業の工場に林立する煙突からの煙によるものであり、その燃料の石炭は何れも九州、四国、或は輸入されたものを神戸港で運搬船に積み替えて大阪港に運んだ。

当時、日本の輸出品の第一位は二位と格段の差で綿製品であった。鉄鋼製品は、まだ輸入の段階であった。大阪地区は東洋紡、日本紡、呉羽紡等の根拠地であり、これ等の工場の製品は何れもこの運搬船で神戸港に輸送され、大型船舶に積み替えて総て中国へ輸出された。

この様に往復の貨物が多量に存在したので運搬船も数多く、後から後へと続いて姿を現していた。因に鐘紡はその拠点を関東の鐘ヶ淵から神戸に移した。

## 二十一、自作農の経験

### 並びにその時の台風に関連しての鵲塚

戦争と共に食糧事情が逼迫して、年貢として納まっていた米俵が金納に変わって行った。已むを得ず自作農を考え、偶々小作に出してない一畝（三十坪）程の小さい田圃（田地）が残っていたので、これに水を引入れ苗を植えて丁寧（草取りも続けた。昭和二十年終戦の年である（昭和十九年の記憶違い）以下、



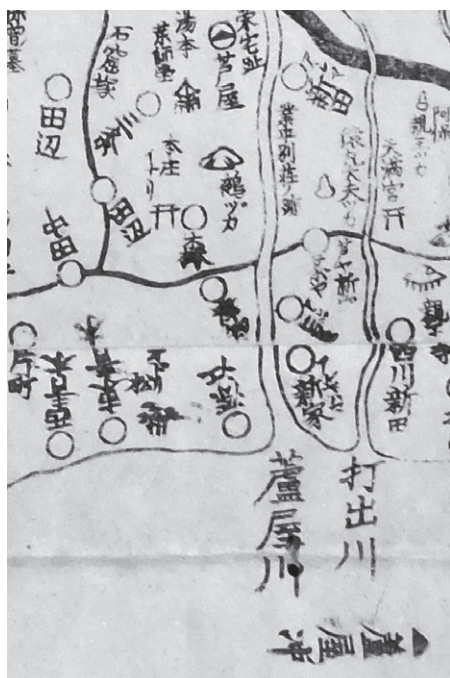


写真 4 鶴塚  
(天保 7 年「摂津名所旧跡細見大絵図」)

台風の名称も同様で、茂義氏自身の補注参照。処が、有名なジェーン台風の襲来で稲が皆倒れ全滅した。翌年、これ又室戸台風の直撃を受け、田に海水が入り丁度穂に花が付いた時であったので花粉が散ってしまい、二、三日後穂が白く変わり枯れた。その明くる年、昭和二十二年漸く僅かながら収穫することが出来た。

室戸台風と云えば次の様な思い出がある。芦屋の業平橋に鶴塚と云うのがある。鶴が黒雲に乗って稲妻を光らせ、雷音を轟かせて御所の屋根に飛び乗って来た。

源三位頼政が暗い闇の中、すかさず強弓を以て矢で鶴を射落とした。大きな音を立てて屋根から転り落ちたので、家来の猪の早太が真つ暗い中を音の方向に走って行った処、思わず左近の桜に突き当たったが、駆け寄り鶴の首を打ち落とした。死体は桂川に捨てられ、流れ流れて芦屋の浜に打ち上げられ、鶴塚

となった由来がある。

室戸台風襲来の時、京都の奥にある清滝も大きな被害を受けた。旅館の従業員が清滝川に流された。その遺体が保津川に流れ込み、桂川を経て淀川に流され遂に海に入る。これが海流に乗って芦屋の浜に打ち上げられた。

芦屋の浜に打上げられて鶴塚となった不思議な漂流コースの実証が、この室戸台風による清滝からの漂流事実を以て現実に証明された。これは学友故安村慶次郎君の実証であり信すべきものと思う。業平橋は今は海辺より遥か上の方にあるが昔はこの辺りまで海辺であったのかも知れぬ。

註 この度拙書をご覧下さって訂正すべき箇所参考資料(国立天文台編理科年表)を送ってもらいました。それにより自作農を始めたのは終戦の前年昭和十九年とし台風の呼称を次の通り訂正いたします。

ジェーン台風 昭和十九年十月七日 台風(呼称なし)

室戸台風 昭和二十年九月十七日 枕崎台風

昭和二十一年は台風襲来無く収穫することが出来ました。

当時我々の中学校の教育は受験勉強だけのものでなく、人格養成を重視して訓練するところであった。その中には円満な人格を作るために笑いの部門も設けていたのだろう。狂言・川柳・狂歌などが国語の教科書の中に出て来た。

その暗さ早太桜に突き当たり

既に記載した通り猪の早太が大きな音を立てて射落とされた鶴を捕らえようと前後を忘<sup>ぼう</sup>ずる闇の中を走り、暗さのため思わず左近の桜にこれも大きな音を立てて突き当たった（鶴は梅若謡本第一七巻参照）。中学生にユーモアのセンスを教え込む狙いである。この読本には早太の川柳の次にこの狂歌が続いていた。

早蕨<sup>さわらび</sup>が握り拳を振り上げて

山の横面<sup>つら</sup>春風ぞ吹く

狂言では大藏流の茂山師の狐の出る狂言「釣り狐」を講堂で演じてもらった。子狐がキョキョと叫びながら飛び廻る。これを真似て廊下をキョキョと飛び廻ったことが記憶に残っている。

平成六年（一九九四）七月一日（火）「朝日新聞」天声人語に「川柳が高校の国語教科書に登場するそうだ。来年度から使われる教育出版の高校国語Ⅱに作家田辺聖子さんの随筆「川柳でんでん太鼓」が引用され箕面市に住む杉本一本杉さんの川柳が紹介される。（天高く月夜のカニに御座候）と云う句だ。月夜のカニは月光を恐れて餌をあされないので肉がつかないと、杉本さんは小さい頃父親から教えられた。痩<sup>や</sup>せていたので月夜のカニともからかわれた。」と記載されている。

漸く川柳が高校の教科書に出て来るようだが我々の中学では既に川柳は狂歌と共に教科書に載っており、ユーモアの育成による人格養成が早くから配慮されていた。

## 史料館日誌抄

史料館副館長 道谷 卓

二〇二三年四月～二〇二四年三月

（二〇二三年）

4月1日 神戸市立図書館の予約図書受取サービスの開始時間を午後0時30分から午前11時からに早める。

20日 神戸高低差学会（見学者 二〇名）

25日 季節の展示コーナーを「端午の節句」に展示替え

30日 東灘区長が来館

6月4日 戦争を語りつぐ会（見学者 四〇名）

10日 季節の展示コーナーを「夏の風物詩」に展示替え

17日 甲南大学文学部（見学者 一八名）

7月16日 ひょうごプレミアム芸術デーに協賛し、田中邦彦画伯の作品を展示

8月5日 本山南婦人会（見学者 一三名）

9月3日 季節の展示コーナーを「中秋の名月」に展示替え

10月1日 企画展示 田中邦彦画伯「東神戸 懐かしの風景展」開始（12月3日まで）

17日 本山第三小学校三年生（見学者 九二名）

28日 東灘ボランティアガイドの会（見学者 五七名）

12月3日 2階の深江文化村コーナーを拡張し、旧古澤邸から寄贈された資料を展示する。

6日 季節の展示コーナーを「正月の風景」に展示替え

1月23日 東灘小学校三年生（見学者 一四六名）

30日 福池小学校三年生（見学者 一三七名）

2月3日 季節の展示コーナーを「ひなまつり」に展示替え

## 資料寄贈者ご芳名

（敬称略）二〇二三年四月～二〇二四年三月

山田良子／嘉門千晴／大国正美／真陽小学校／古澤 弘／  
田中千尋（道谷 卓記）